

■専門委員研修会概要録

平成 29 年 3 月 13 日(月)午後 1 時 30 分
一般財団法人群馬県中小企業会館

テーマ 上州の各藩の領地模様

—行政区分の歴史的変遷と上州人堅気—

講師 高崎史志の会理事 堤 克政 氏

講師略歴； 1943 年生まれ。高崎高校から慶應義塾大学法学部法律学科卒業後、群馬銀行に入社。1999 年退職、同行健康保険組合常務理事に就任。2007 年退任。高祖父堤新五左衛門順美が高崎藩松平(大河内)家の家老、同家目附の曾祖父金之丞克寛が下仁田戦役で戦死の因縁から、亡父の後を受け頼政神社氏子総代、大信寺檀家総代、下仁田戦役戦没者遺族会代表。高崎の歴史を語り継ぐ活動を続け、高崎史志の会の理事を務めている。

(「群馬県の独特な県民性はどこから来たのか。そこには江戸時代に起因する歴史があった」。今回の専門委員研修会は、歴史研究者である堤克政氏を招き、群馬の行政区分の変遷を歴史的な視点から講演していただき、自分たちの地域がどのような経緯で現在に至ってきたのか、そして上州人の気質に大きな影響があった事実を再確認し、今後の広報啓発活動にも活かしていくことを目的として企画した。以下は講師によりポイントを取りまとめたいただいた講演概要録である。)

1 多数の領主で支配が分散

(1) 分散のない外様大名支配国

平安時代から江戸時代にかけて区分された令制国別に、その国に所領を有した藩の数を見ると、領主が譜代大名(徳川の家臣)や家門(徳川家の親戚)の地域と、外様大名(関ヶ原合戦後に徳川政権に従った大名)が領主の地域では領地を有する大名の数が著しく異なる。

外様の雄藩が治めた国は領主が一大名だけである。

加賀国(石川県)の 2 藩と越中国(富山県)の 2 藩はいずれも前田氏、薩摩国は島津氏、筑前国(福岡県)2 藩は黒田氏、安芸国は浅野氏、長門国と周防国(山口県)3 藩は毛利氏、因幡国(鳥取県)と備前国(岡山県)は池田氏、阿波国(徳島県)は蜂須賀氏、土佐国(高知県)は山内氏(表 1 下参照)などである。これらの外様の雄藩が治めた国は、藩主大名家が変動しなかったため、居城がある都市を中心にまとまり独自の文化を形成して行った。

(2) 支配者が分散していた国

徳川政権を支える譜代大名や旗本の領地は、関東地方、東海地方、近畿地方に多く、関東地方は特に多かった。旗本は 1 万石以下で領地が小さく分散しがちであるが、譜代大名も彦根藩 30 万石と会津藩 23 万石は別格として、15 万石以下数万石の藩が多数を占めていたため、国別にみると前述の地方は多数の藩が存在し、支配者が分散した国である。

藩数が1位の国は下総国(茨城県南部・千葉県北部)、2位は下野国(栃木県)、4位は常陸国(茨城県)、5位は上野国(上州・群馬県)・武蔵国(埼玉県・東京都・神奈川県の一部)・上総国(千葉県)(表1上参照)で、3位の近江国(滋賀県)以外は関東地方である。徳川幕府の膝元であることがその理由である。

譜代藩は、その領地が居城や陣屋周辺(「城付き領」と言う)と遠く離れた地(「飛地」と言う)に宛行われる場合が多かった。飛地は関東地方や近畿地方に配されることが多いため、関東地方の国では藩主の数が多いだけでなく、本拠地が他国の大名の藩領も多かった。上総・下総・下野・武蔵国は、これらの国に本拠地を置く藩より他国に本拠地を持つ藩の方が多かった。

2 上州の領主状況

(1) 上州以外の支配者

上州も領主の数が多い国で、本拠地を有する9藩と他国に本拠地を持つ9藩の合計18藩があり、(表1の上参照)全国的には上位に位置したが関東地方の中では下位に位置する。しかし、支配者は大名だけでなく、幕府や旗本がいるため分散度が高かった。幕末に上州に本拠地を有する藩の石高は上州全体の44%と半分以下で、幕領(「御料所」と言う)が41%、旗本領(「御知行所」と言う)が12%、他国に本拠地がある藩の飛地が3%であった。(表2参照)

(2) 飛地の存在

居城ないし陣屋が遠方にあるが上州に所領を有した藩が、幕末には10藩あった。これらの藩はいずれも小藩のうえ上州の所領は小さく、関東地方(武蔵国岩槻・武蔵国半原・下野国佐野・上総国一宮・上総国請西)の藩が半数あるが、他は近畿地方(和泉国泉・山城国淀・丹波国峰山)、東海地方(三河国西端)、東北地方(出羽国松嶺)と遠方であった。(表2参照)その領村の農民にとって藩主の存在は何処の殿様かも分からない状況かと推測される。(表2参照)

(3) 相給状況

納税者である農民が支配者に納める年貢は、個人ではなく村単位で納めた。一つの村に一人の支配者と思われがちだが、一つの村に対し複数の領主が割り当てられる状態の「相給」が見られた。このため一層支配者が分散していた。基本は一つの村は幕府領か、一人の大名領ないし一人の旗本領として宛行われるが、一つの村が幕領と大名領に、或は、複数の大名領や複数の旗本領に、幕領と大名領と複数の旗本領に分れる村もあった。

上州は1190の村のうち給が単独の村は856村(幕府単独領392村と藩単独領464村)で、相給の村が334村と約3割を占めている。しかし、下野国は上州より所領藩の数が多いだけでなく、1374村のうち相給の村は595村43%と多い。この背景には上州に比べ幕領が少なく旗本領・藩領が多いことが挙げられる。(表3・4参照)

地域に幕領、大名領、旗本領が混在しているだけでなく、一つの村でもそれらの領主が複数存在する状況は、支配する側及び支配される側共に地域に対する意識は希薄であろうし、纏まりもなかったと思われる。

(4) 上州の地域別領主の傾向と相給

上州の所領傾向として、郡によって領主の偏りが見られる。利根・吾妻の北毛2郡は殆ど幕府領、山田・新田・邑楽の東毛3郡は幕領と旗本領、勢多・那波の2郡は大半が藩領、群馬郡は藩領が中

心だが幕領と旗本領も約 3 割ある、そして、甘楽郡は幕領と旗本領、緑野と多胡郡は旗本領といった傾向である。

この結果、幕領は代官が支配者につき吾妻・利根の 2 郡は地域としての纏まりは無く、旗本領も細切れ支配のうえ相給の場合も多いので、東毛 3 郡と緑野・多胡 2 郡は平均給数が 2 倍以上で、一村が何人もの領主に宛行われ、今日それらの郡に成立した市町村は、地域の塊に欠けている。(表 3 参照)

(5) 藩主の交替

江戸時代に藩は廃止になったり新しく起きたりした。また、譜代藩を中心に頻繁に「転封」(大名の異動)があった。幕府が成立してから明治維新までの間に大名家が 100 年間以上務めた藩についてみると、関東地方では幕府の閣僚を務める有力藩が多くあったので変動が激しかった。

上野国については、転封しなかった藩は七日市藩、一時廃藩となったがその後復活した大名家が変わらなかった藩が小幡と吉井藩、他藩の管轄になったりしたが復活し変わらなかった藩が伊勢崎藩で、その他の前橋・高崎・館林・沼田・安中藩は大名が異動している。

藩主の交替が行われると、その藩の領地が前任者と後任者で同じではなく、一部が幕領になったり他藩領になったり、領主が変動する場合がある。他の領主となっても時間を経て再び元の藩領になる場合もあるが、藩主の変動は地域に大きな影響を及ぼした。(別表参照)

3 上州の支配者が分散した大きな原因

上州の村々が多く支配者に宛行われていた根本的な原因は、関東 8 ヶ国が幕領・譜代大名・旗本領に細分化されていたことに因る。それに加えて、上州では、リーダーとなれる要素があった館林藩と前橋藩が、幕府の事情や御家の事情から、所領が極めて分散支配になったことが挙げられる。結果論ではあるが群馬県に大きな纏りの行政区域が出来なかった責任は藩である。

(1) 館林藩の解体

館林藩は後世徳川四天王とうたわれた榊原康政が 10 万石を宛行われて始まり、1661 年に徳川綱吉が配された。綱吉は三代将軍家光の子で、家光が死去すると長兄家綱が四代将軍、次兄綱豊と共に 15 万石が与えられ、その後、館林に 25 万石で配された。所領の半分は隣国下野の梁田・足利・安蘇の 3 郡にあったが、関東地方では御三家の水戸に次ぐ上州を代表する藩になった。

家綱には子がいなかったもので、死去すると綱吉が五代将軍になった。子の徳松が襲封し館林藩は残ったが、徳松が夭逝すると廃藩となり、上野の領地 158 村約 12 万 9 千石は、幕領が 27 村、旗本領が 108 村・386 家の相給、幕領と旗本領の相給が 23 村 136 家の相給に分散した。(表 9 参照)館林領から旗本領になった 108 村のうち、単独は 37 村(約 3 分の 1)で 71 村が相給になってしまった。(表 10 参照)最も分散した邑楽郡北大島村(現館林市大島町)は 4,667 石と大きい村ではあるが 23 給、つまり 23 人の旗本が支配していた。(表 11 参照)村境でさえもめごとの原因になるが、一つの村であるのに A の年貢を治める先は甲、隣の B は乙、少し離れた C は丙といった状態で、訴訟先についても管轄が入り組む状態であった。

もしも、東毛 3 郡が館林藩徳川家 25 万石で続いていたら、領地も拡充されたかもしれないし、少なくとも一体感が続いたかもしれない。徳川家館林藩は上野と下野にまたがる所領であったので、両県にまたがる都市で県域も異なったかもしれないが(明治初期に邑楽・新田・山田 3 郡は栃木県に組込まれたことがある)、本拠地が館林であることから下野国梁田・足利・安蘇の 3 郡の全部ないし一部が群馬県になったかもしれない。徳川家館林藩の解体が悔やまれる。

(2) 前橋藩領の激動

ア 酒井家の所領拡散と転出

前橋藩は1601年に酒井重忠が3万3千石で入封し、二代目の忠世が二代・三代将軍の側近として創業期の幕閣において大老まで昇りつめ、所領も急激に増加し12万2500石となった。しかし、領地の範囲は城付き領の群馬・勢多・那波3郡の他に、上野国内で緑野・碓氷・多胡3郡に広がり上州一の藩に成長したが、かなりの部分が飛地で与えられた(近江国栗太・野洲・蒲生3郡と武蔵国榛沢郡)。四代目忠清も大老として四代将軍のもと辣腕を振り「下馬将軍」と呼ばれた。石高は15万石になったが、増加部分は飛地で、武蔵国豊島・児玉2郡、相模国三浦郡、上総国望陀・市原・夷隅3郡に宛行われ、拡散状態が増した。

九代忠恭の代には多胡郡の代りに佐位郡、上総国市原・夷隅郡の代りに安房国長狭・平・安房3郡、武蔵国豊島・児玉2郡の代りに相模国鎌倉・高座・愛甲・淘綾・大住5郡、伊豆国田方郡が与えられ、領地は6ヶ国20郡に及んだ。忠恭は所領の分散について、その不便さについて家臣からの突き上げを受け、纏まった地域への移封を画策し続けた。タイミング良く姫路藩が転封の対象となった。理由は、姫路藩主松平(結城)朝矩が親の死により11歳で襲封したが、若年では西国に対する重要拠点である姫路城主は務まらなると転封させられた。老中首座に就いていた力関係も利いか、松平朝矩が前橋へ移封され、酒井忠恭が姫路へ異動することが出来た。如何に名門の家にして老中と雖も、前橋藩領を纏めるため多くの藩領・旗本領を異動させることは至難の業につき、簡単に手に入る方法として譜代藩領としては珍しく纏まっている姫路へ動いた。

徳川四天王の一角酒井忠次の子孫という名門に加え、忠世・忠清・忠恭と幕閣のトップに就いていた酒井家が、自家のためだけで前橋を捨てたともいえる行動は、上州の地域が纏まる機会を失う原因と言える。

イ 結城松平家の激しい所領分散

酒井忠恭の後に入封した松平(結城)朝矩は、徳川家康の次男結城秀康系の家門の家柄である。この結城松平家は「引越し大名」の異名をとるほど転封の連続であったため、その所領は落ち着かなかつた。転封の理由の多くは襲封した後継者が若年であったことと左遷である。

初代直基が勝山藩(現福井県勝山市)―大野藩(現福井県大野市)―山形藩―姫路藩

二代直矩が姫路藩―村上藩(新潟県村上市)―姫路藩―日田藩(大分県日田市)―山形藩―
陸奥白河藩(福島県白河市)…転封5回

三代基矩は白河藩 四代明矩が白河藩―姫路藩

五代朝矩が姫路藩―上野前橋藩―武蔵川越藩(川越市)

六代から十代は川越藩 十一代直克が―前橋藩へ

松平朝矩も前任の酒井忠恭同様15万石で所領村はそのままであった。徳川家家門の大名が就任し上州の忠心藩になることが期待されるが、入封後19年で利根川の激流に因る城の崩壊を理由に川越への移城が認められ、前橋は陣屋支配の飛地となった。

幕末になり松平直克が前橋城再築を願い承認され、領内生糸商人らの献金により完成し、約100年経って帰城になった。しかし、17万石に増加した所領は比較的近い武蔵国内が増加したが、引続き5ヶ国20郡で、明治維新直前には6ヶ国28郡に一段と分散し。上野内の比率は44%と半分以下であった。(表5参照)また、上野国内の領村も現在の行政区分(平成の合併前)で30市町村に分散、前橋市の石高比率は60%でしかなかった。(表6参照)17万石の家門大名が前橋藩主になったが、同じ結城松平家にあつて引越し大名と異名をとる家であったため、前橋においても領地

が纏まった藩とはなれなかった。

4 都市の纏まりへの影響 ―城付き領のかたち―

上州のリーダー前橋藩の城付き領が石高に比して狭いうえ範囲が広がった。また、前橋藩以外の上州他諸藩も城付き領のウェイトが低い。つまり石高からみて中小藩のうえ、本拠地の石高が少ないため、明治維新になって城下町にも拘らず地域の大きな町になれなかった。

城付き領村と飛地領村 前の数＝城付き領の村数 後の数＝飛地の村数 ()は国数

○飛地の有った藩

館林藩 6万石:43・80(3) 沼田藩 3.5万石:55・70(2)

安中藩 3万石:40・23(1) 小幡藩 2万石:34・4(1) 吉井藩 1万石:16・15(2)

○飛地の無かった藩

伊勢崎藩 2万石:48・0 七日市藩 1万石:21・0 (表12参照)

その様な中であって、高崎藩は8.2万石(実高9万石)の中規模藩であるが、所領が纏まっていたため明治から昭和にかけて都市地域が纏まり易かった。城付き領村89に対し飛地領村64であるが、石高は約5.6万石対3.4で城付領が63%を占めた。(表7参照)しかも、譜代藩の多くの城付き領3～4里圏内であるのに対し、高崎藩は2里圏内に纏まり稠密な状態であった。そのため、今日の市町村区分でも5市町に纏まっている。(表8参照)前橋藩17万石に対し高崎藩は8.2万石と半分であるが、城付き領だけの比較であれば共に5万7千石である。

5 群馬県中央部の藩領模様 (図参照)

群馬県の中央部に位置する今日の前橋・高崎・伊勢崎・藤岡・玉村の一带は、江戸時代の状況(幕末期)をみると幕領・大名領・旗本領が入組んでいた。

- ・那波郡(主に伊勢崎市と玉村町)は伊勢崎藩を中心に前橋藩領・高崎藩領・武蔵岩国藩飛地と幕領・旗本領
- ・佐位郡(主に伊勢崎市)は伊勢崎藩領を中心に上総一宮藩飛地と幕領・旗本領
- ・勢多郡北東部から南部(主に前橋市)は前橋藩領を中心に山城淀藩・下野佐野藩・出羽松嶺藩・和泉泉藩・下野佐野藩の飛地と幕領・旗本領
- ・群馬郡の東南部(主に旧群馬町)は高崎藩領・前橋藩領と上州の沼田藩・安中藩・吉井藩の飛地と丹波峯山藩の飛地
- ・緑野郡(主に藤岡市)は幕領を中心に高崎藩領・下野佐野藩飛地と旗本領

上記の郡域のうち、少なくとも那波・佐位(現在は両郡が合併し佐波郡)の2郡と勢多郡が全て前橋藩領であれば、前橋は上州の中心地として確固たる地位を築いたであろう。

表1. 国別の所領藩数

国名	所領藩		
	自	他	計
1 下総	8	23	31
2 下野	10	20	30
3 近江	8	20	28
4 常陸	11	11	22
5 上野	9	9	18
5 武蔵	5	13	18
5 播磨	9	9	18
5 上総	7	11	18
9 三河	8	9	17
9 河内	2	15	17
11 越後	11	5	16
11 摂津	4	12	16
13 信濃	11	4	15
14 岩代	5	9	14
14 磐城	9	5	14
14 丹波	7	7	14
17 伊勢	7	6	13
18 羽前	8	4	12
18 美濃	9	3	12
18 大和	8	4	12
18 備中	6	6	12
加賀	2	0	2
越中	2	0	2
薩摩	1	0	1
筑前	2	0	2
安芸	1	0	1
周防	3	0	3
因幡	1	0	1
備前	1	0	1
阿波	1	0	1
土佐	1	0	1
陸前	2	0	2
尾張	1	0	1
紀伊	3	0	3

表2. 上野国の藩領内訳

藩名	石高	構成
幕府	258,330	0.41
前橋	89,436	
高崎	55,426	
館林	40,867	
安中	17,066	
沼田	21,844	
伊勢崎	15,809	
小幡	22,472	
七日市	13,307	
吉井	503	
小計	276,730	0.44
泉	2,207	
淀	3,882	
岩槻	565	
佐野	4,533	
松籙	2,354	
一宮	848	
西端	1,517	
半原	1,666	
峯山	1,002	
請西	340	
小計	18,914	0.03
旗本領	74,203	0.12
寺社領	7,002	0.01
合計	635,179	

*旧高旧領取調

表3. 上野国の相給状況(元禄16年(1703))

郡名	幕府		旗本		藩		幕・旗		幕・藩		藩・旗本		藩・幕		その他		合計	平均	石数	1村	1給	
	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村						
山田	8	8	47	142			3	12									58	162	2.79	36,212	624.3	223.5
新田	48	48	44	111	1	1	17	56			3	10					113	226	2.00	65,463	579.5	289.7
邑楽	24	24	46	195			15	100									85	319	3.75	79,255	932.4	248.4
勢多			3	145	145	3	6					1	2				152	156	1.03	60,625	398.8	388.6
那波			5	5	52	53	1	3			2	4					60	65	1.08	27,026	450.4	415.8
佐位	10	10	7	15	16	16	4	10			2	6	1	3			40	60	1.50	16,916	422.9	281.9
群馬	34	34	37	64	128	128	6	20									205	246	1.20	114,695	559.5	466.2
片岡					3	3											3	3	1.00	4,267	1422.3	1422.3
碓氷	5	5	10	15	38	38	6	19			4	11	1	3			64	91	1.42	39,875	623.0	438.2
甘楽	64	64	12	24	51	51	2	9	2	4	1	5					132	157	1.19	50,120	379.7	319.2
緑整	3	3	18	56	15	15	4	15			4	10	2	6			46	105	2.28	29,514	641.6	281.1
多胡	6	6	14	29	1	1	6	22									27	58	2.15	12,291	455.2	211.9
吾妻	75	75	1	2	12	12											88	89	1.01	24,871	282.63	279.45
利根	115	115			2	2											117	117	1.00	30,758	262.89	262.89
合計	392	392	244	661	464	465	67	272	2	4	17	48	4	12			1190	1854	1.56	591,908	497.4	319.3
平均			2.7	1.0	4.1	4.1	2.0	2.8	3.0													

表4. 下野国の相給状況(旧高旧領帳)

郡名	幕府		旗本		藩		幕・旗		幕・藩		藩・旗本		藩・幕		日光領		合計	平均	石数	1村	1給	
	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村	給	村						
那須	46	46	64	102	159	159	13	44			3	4					285	355	1.25	120,896	424.2	340.6
堀谷	11	11	19	33	101	101			1	2	3	8	1	3	13	13	149	158	1.06	55,582	373.0	351.8
芳賀	44	44	54	101	52	52	22	67	3	3	13	41	6	20			194	328	1.69	134,973	695.7	411.5
河内	19	19	23	34	113	113	18	55	5	10	4	11	3	18	22	22	207	260	1.26	110,069	531.7	423.3
都賀	22	22	114	200	159	168	14	33	10	21	29	83	6	25	36	36	390	588	1.51	222,767	571.2	378.9
寒川					13	13											13	13	1.00	8,961	689.3	689.3
安蘇			23	73	28	30	1	2			10	41	1	7			63	153	2.43	65,577	1040.9	428.6
足利	1	1	25	53	7	7	2	4			13	29					48	94	1.96	32,747	682.2	348.4
築田			11	61	4	4					10	30					25	95	3.80	14,191	567.6	149.4
合計	143	143	333	657	636	647	70	205	19	36	85	247	17	73	71	71	1374	2044	1.49	765,763	557.3	374.6
平均			2.0	1.0	2.9	2.9	1.9	2.9	1.9	2.9	2.9	2.9	2.9	4.3	1.0	1.0						

表5. 前橋藩松平氏時代の領地の推移

藩主名	安政7(1860)		慶應時		構成比
	直侯	村数	石高	村数	
上野郡多	97	42,033	102	43,226	21%
群馬	54	28,969	59	28,637	14%
那波	13	6,408	15	6,461	
佐位	2	672	2	672	
新田			21	6,972	
山田			1	98	
邑楽			10	2,836	
小計	166	76,082	210	88,902	44%
武蔵	4	823	2	657	
見玉	4	542	4	873	
入間	123	56,930	10	2,995	
高麗	20	9,208	18	9,070	
比企	71	29,131	60	26,719	
埼玉	16	9,255	10	8,005	
大里	9	3,109	8	3,110	
多摩	13	2,709	13	2,709	
秩父	7	1,487	7	1,325	
那賀	3	1,264	3	1,264	
望陀	64	6,681	63	11,239	
市原			3	1,045	
天羽			15	6,081	
周淮			15	3,217	
安房	19	5,088	19	5,416	
安房	15	5,491	17	5,358	
朝夷			31	9,765	
常陸			25	9,299	
筑波			7	4,147	
足利			3	448	
安蘇			4	876	
近江	10	2,987			
野洲	2	1,723			
蒲生	1	336			
飛地計	381	136,764	337	113,618	56%
実高	547	212,846	757	202,520	
拝領高	170,000		170,000		

表6. 前橋藩の上野国内町村別石高

市町村名	石高
前橋市	53,554
富士見村	4,534
大胡町	609
宮城村	21
東村	592
玉村町	2,619
伊勢崎市	1,589
境町	80
小計	63,598
利根村	478
昭和村	2,165
赤城村	2,247
子持村	364
澁川市	1,777
北橋村	2,067
吉岡町	2,523
伊香保町	421
箕郷町	221
榛名町	201
群馬町	1,583
高崎市	1,468
小計	15,515
板倉町	590
明和村	688
千代田町	613
館林市	788
大泉町	157
新田町	301
尾島町	1,286
戴塚町	1,607
笠懸町	3,229
太田市	548
小計	9,807
前橋藩計	88,920
前橋市	60.00%

表7. 高崎藩の領地の推移

藩主名	寛文4(1664)	明和2(1765)	虎藩時
国	安藤重博	松平輝貞	松平輝聲
郡	村数	村数	村数
上野	90	37,500	74
群馬	52,769	3,500	44,655
片岡	3	4,206	3
碓氷	1	25	9
那波		1,365	5,814
緑塗		1,301	1,301
城付領	94	57,000	68
構成比	0.95	44,372	89
武蔵	見玉	0.59	56,726
新座		5	2,842
海上		17	5,935
蒲原		26	13,418
神崎	5	2,442.56	42
高嶋	1	557	25,013
河内	表田	13	5,329
撰津	豊嶋	6	1,774
川辺		4	937
有馬		5	1,960
飛地計	6	3,000	76
実高	100	60,000	144
拝領高	60,000	72,000	82,000

表9. 館林藩徳川氏領から幕領等になった変化

所領者	村数	石高	1村当り	1給当り
館林藩	158	129,298	818.3	
幕府	27	29,362	1087.5	
旗本	108	386	71.761	185.9
幕府・旗本	23	136	28,175	1225.0
現在町村	給数	石高	平均	
館林市	23	4,667	203	
同 大久保村	15	2,237	149	
同 下小泉村	13	1,897	146	
山田郡竜舞村	16	2,906	182	

表11. 旗本知行地の相給が増加

旗本相給の村	石高	平均
邑楽郡北大島村	23	4,667
同 大久保村	15	2,237
同 下小泉村	13	1,897
山田郡竜舞村	16	2,906

表8. 高崎藩の上野国内

市町村	石高
市町村	別石高
高崎市	45,723
群馬町	3,608
箕郷町	1,341
前橋市	4,534
玉村町	1,518
合計	56,724

表10. 旧館林藩領の

給数	村数	石高	平均
1	37	11,878	321
2	12	4,337	181
3	22	16,913	256
4	11	7,392	168
5	6	4,956	165
6	6	6,798	189
7	4	2,501	89
8	2	2,359	147
9	3	5,694	211
11	1	3,226	293
13	1	1,897	146
15	1	2,237	149
16	1	2,906	182
23	1	4,667	203
合計	108	77,761	

表12. 上野諸藩領

藩	国	郡
館林	上野	邑楽43
		新田1
		羽前村山39
		下野 都賀3
		安蘇1
		河内 丹南10
		丹北16
		八上11
沼田	上野	利根50
		群馬5
		河内 若江5
		志紀5
		美作 勝北6
		勝南3
		英田51
		那波30
		佐位18
		碓氷34
		群馬6
		香取9
		匝瑳10
		海上4
		甘葉34
		多胡3
		碓氷1
		甘葉21
		緑野10
		多胡6
		群馬7
		甘葉1
		勢多1
		夷隅3
		長柄3

*数字は村数

別表		上野国及び関八州主要藩の藩主大名と石高の変遷										*印:松平氏			
高崎藩主	1598 藩主 井伊 石高 120	1600 城番 酒井 50	1604 藩主 戸田 50	1616 藩主 戸田 50	1617 藩主 藤井 50	1619 藩主 安藤 50	1625 藩主 藤井 50	1636 藩主 藤井 50	1695 藩主 大内 50	1710 藩主 大内 50	1717 藩主 大内 50	1749 藩主 結城 150	1768 藩主 川越 150	1863 藩主 結城 170	
前橋藩主	1601 藩主 酒井 33	2代忠世が無城5万石+遺領3.3万石、後大老12.25万石に4代忠清大老として権力振り「下馬將軍」													
館林藩主	1600 藩主 榊原 100	1617 藩主 榊原 85													
安中藩主	1615 藩主 井伊 30	1615 藩主 井伊直政の長子直勝が初代水野													
沼田藩主	1600 藩主 真田 30	初代信之が松代10万石へ。長男信吉一熊之助相次ぎ死去。次男信政が一時的に4代目。信之死去により信政松代襲封、信吉が5代目。松代に対抗し石高増を図り圧政。幕府御用不始末改易。													
伊勢崎藩主	1601 藩主 稲垣 10	1616 藩主 前橋藩領													
小幡藩主	1590 藩主 奥平 30	1602 藩主 水野 10	1615 藩主 織田 20	1616 藩主 永井 20	1617 藩主 織田 17	1617 藩主 信長次男信雄が大和宇陀3万と甘楽2万、永井を経て信雄4男信良が甘楽2万石独立	1767 藩主 奥平 20								
七日市藩主	1616 藩主 前田 10	前田利家5男利孝は生母芳春院と徳川へ人質、江戸で幼少期を過ごし、大坂の陣の武功により立藩。													
吉井藩主	1590 藩主 菅沼 20	1610 藩主 幕領													
川越藩主	1590 藩主 酒井 10-37	1627 藩主 酒井 100	1635 藩主 堀田 35	1639 藩主 大内 60-70	1682 藩主 堀田 10	1698 藩主 幕領 10	1709 藩主 鷹司 10	1709 藩主 鷹司 10	1704 藩主 秋元 50-60	1767 藩主 結城 1866	*松井 80				
古河藩主	1602 藩主 戸田 20	1612 藩主 小笠原 20	1619 藩主 奥平 110	1622 藩主 永井 72-89	1633 藩主 石川 70	1633 藩主 奥平 110	1685 藩主 藤井 90-80	1694 藩主 大内 70	1712 藩主 本多 50	1759 藩主 土井 70	*松井 80				
佐倉藩主	1602 藩主 松平 50	1607 藩主 小笠原 28	1610 藩主 土井 142	1633 藩主 石川 70	1635 藩主 形原 40-36	1661 藩主 大給 60	1678 藩主 大久保 83	1686 藩主 戸田 61-67	1701 藩主 稲葉 102	1746 藩主 堀田 110	*松井 80				
小田原藩主	1590 藩主 大久保 45-65	1614 藩主 城番 阿部 50	1619 藩主 阿部 50	1624 藩主 城番 稲葉 85	1632 藩主 城番 稲葉 85	1686 藩主 大久保 103-113	1686 藩主 大久保 103-113								
宇都宮藩主	1601 藩主 奥平 100	1619 藩主 本多 155	1622 藩主 奥平 110	1622 藩主 奥平 110	1668 藩主 奥平 150	1685 藩主 奥平 90	1688 藩主 本多 110	1697 藩主 阿部 100	1710 藩主 戸田 67-77	1749 藩主 深溝 65-77	*松井 80				

